

陸生ホタル研

№67

2015年1月15日

陸生ホタル生態研究会事務局

電話：FAX042-663-5130

Em:rikuseihotaru.07@jasmine.ocn.ne.

1 佐渡市・久知河内地区のオバボタルの生息分布

若杉 和男、平田 秀彦、小俣 軍平、藤森 憲臣(名古屋大学 文責)

(1) 調査地概要

・佐渡島(さどがしま)とは、、、

新潟県西部に位置する離島で、佐渡全域が新潟県佐渡市である。

人口は58,047人(2014年12月1日現在)。

面積は855.26km²、本州などの主要4島及び北方領土を除く、日本の島の中で沖縄本島に次ぐ面積である。

また周囲262.7km、最高標高は金北山(標高1,172m)で、その西隣の妙見へ連なる。



・久知河内(くじかわち)とは、、、

佐渡島中東部に位置し、集落を貫流する久知川周辺はホタル科昆虫(主に、ゲンジ及びヘイケボタル)が自然発生する美しい水辺環境である。特に、集落から上流に向かっての川沿い約2.5kmは「ホタルロード」と呼ばれ、初夏はホタルの名所となっている。



(2) 調査地における環境保全活動団体(特に、ホタル)

<久知河内ホタルの会>

ホタルの育成を通じて豊かな自然環境を守り育てることを目的として、平成9年に集落全員が参加し発足しました。年1回の総会、ホタル祭りのノボリの設置、河川クリーン作業等の活動を行っています。参加者には提灯の貸出、川沿いを上流に散歩してもらいます。

団体名称 久知河内ホタルの会(くじかわちほたるのかい)

代表者 会長 菊池 秀夫

連絡先 (所在地、電話番号は、個人情報のため未記載)

会員数 130

活動開始日 1995年4月

団体の特徴

久知河内地区は、佐渡の東部にあり佐渡の玄関・両津港から車で15分ほどのところにある地域です。かつて、数が減ってからも野生のトキが生息していた清水平や生椿地区の近くにあり、生椿を水源とする久知川が集落の中を流れています。その久知川や、山へ続く田んぼには毎年たくさんのホタルが舞い、川の上流にむかって2.5キロ続くホタルロードはホタルの名所となっています。毎年6月下旬に行われる久知河内ホタル祭りにはたくさんの人が訪れます。

ホタルの会はホタルの生息環境を守るために集落の人たちによって結成されました。会の活動を通じて、島内外の多くの人と交流を行い、トキの野生復帰にむけての活動もしています。

団体からのメッセージ

これからビオトープづくりをさらに進めていきます。ホタルの生息環境整備、河川環境の整備も進め、鮭があがる環境をとりもどしたい。海・山・川つながりと生態系を蘇らせ、トキの餌も増やして、豊かな久知川を再生することを目指しています。UXトキプロジェクトなど外部の人との協働も進め、たくさんの人たちとともに元気な久知河内にしていきたいので、参加をお待ちしています。

(3) 材料及び方法

ホタル科昆虫(佐渡島)における記録は少なく、本調査では新潟県内で分布リストのある昼行性及び夜行性ホタルを6種で選定して、まず生息種リストを得るために定性調査を実施した。

2014年7月中旬に、当該調査地にてホタルを捕獲した。生体を捕獲しそのまま、もしくは発光を確認後に99.5%エタノールで液浸して4℃で保存した。

現地には、日中に渡航・入島し、明るいうちに調査ルートを踏査した。その後、夜行性のゲンジ及びヘイケボタルに関しては日没直後より21時程度まで、ヒメボタル及びクロマドボタル(幼虫)、ムネクイロボタル(幼虫)、オバボタル(幼虫)に関しては日没後21時、23時、25時の2~3回に分け、ルートセンサス法(歩速:2km/h)により目視調査(見つけ捕りを含む)を行った。また、翌朝7時から12時までの間に、昼行性であるクロマドボタル及びムネクイロボタル、オバボタルの成虫を対象種とし、上記同様にルートセンサス法により目視調査を行った。

(4) 結果及び考察

① オバボタルの分布

文献調査(久保田正秀氏・自然環境研究センター)及びインターネットを用いて、佐渡島におけるホタル科昆虫の現生息状況についての既知情報を整理した。

その結果、「新潟の自然(1986)」新潟県の自然刊行委員会の中に1968年時のホタル科昆虫の確認種数の記載があった。文献を引用して、その本文部分を以下に掲載する。

3) 鞘翅目

(新潟県内に)甲虫類は、現在630種が明らかにされている。(1968年当時)

<割愛>

紅螢科は県産19種中佐渡島に3種、螢科は県産6種中3種…(中略)…佐渡から記録されているが、これらは何れも分布の広い普通種である。

<割愛>

以上は要約するに佐渡島の鞘翅目昆虫は新潟本土のそれに比して著しく貧弱な様に思われる。それにも係らず島産昆虫の中では他の諸目に比して種類も豊かであり個体数も多いものごとくである。

また、「新潟県昆虫図鑑(下):1982」の中にはゲンジ及びヘイケ、オバボタルの図(写真)を含めた記載があった。文献を引用して、その本文部分を以下に掲載する。

オバボタル(ホタル科)

すみ場所

日本全土に見られ、佐渡島と粟島にもいる。国外ではサハリンと朝鮮に分布する。

からだの特徴

体長は7~12 mm。からだは黒色をした平たい種で、つやはない。前胸には2つの赤色の紋があるほか、はらの後ろの方の2節も赤い。よく似たものにオオオバボタルがいるが、もっと大型で前胸の赤色の紋が大きく、触角も長い。また、クロマドボタルには前胸に赤い紋がなく、そのかわりに透明な窓がある。これらのホタルは、ゲンジボタルなどと違い発光しない。

生活のようす

5月ころから8月ころにかけて現れ、いろいろな花の上や草の間に普通に見られる。

本調査では、2014年7月の現地調査において「ゲンジ及びヘイケ、オバボタル」のホタル科昆虫3種の生息確認をした。その後の文献調査(基本的な調査手順としては逆ではあるが、、、)で同様の結果が得られ、本現地調査の正確性が高められたと言える。ただし、これまでに見つかっていないホタル科昆虫(特に、ヒメボタルなど)に関しても知見を補う必要がある。

② オバボタルの捕獲及び標本保存

島内の複数地点において、オバボタルの個体が確認の上インターネットにも掲載されている。しかし今回は、久知河内地区(久知川ダム下流)にて重点的に現地調査を実施し、オバボタル個体を捕獲及び標本保存した。また、本調査(7月中旬)の2か月後、9月中旬にも再調査を行ったが、その際にはホタル科昆虫の生息確認には至らなかった。

③ オバボタルの前胸背

昭和ホタル研究の功績「ホタル(神田左京)」の中でも注目されている、この話題について記す。

文献を引用してその本文部分を以下に掲載する。今一度、オバボタルの前胸背についての見解を理解していただきたい。

・オバボタル(*Lucidina biplagiata*)の成虫

このホタルを見て真っ先に目に付くのは触角です。体が小さい割合いに触角がばかに長く、幅もそうとう広いのですから。ことに雄のは長くて太いのです。この大きな触角を動かしながら、せわしなく歩き回るのもこのホタルの雄の特徴です。歩く時には翅は一直線にのびたまま、からだの尾端を2節ほどへの字形に曲げています。

・前胸(イ型)

前胸はだいたい半楕円形です。といってもこの曲線の輪郭は波打っています。この下部の基線も一直線ではなく、中央が山形にあがり、左右の両端は下がっています。この半楕円形の中には左右に桃赤色の長楕円形のところが1つずつあります。この赤いところはちょうど血がやり傷からでも、にじみ出ているように見えます。ですから傷が2つ(biplagiata, bi=2つ, plag=傷, 2傷)という学名の特色になったようです。オバボタルという名は誰がどうして付けたのか、ずいぶん気が利かない名だが、この学名の方はさすがにいい名です。

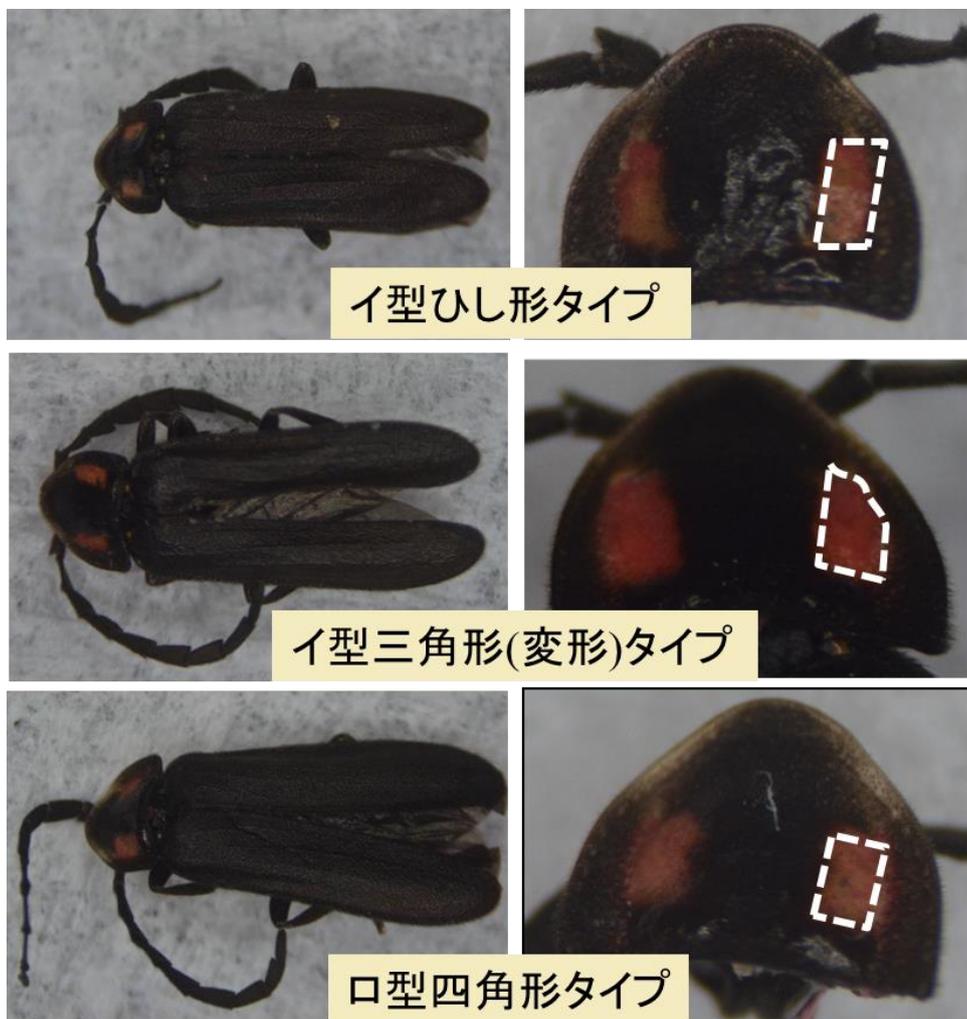
この傷と傷の中間、半楕円形の中央は黒色だが、黄色も少し入っているようです。前胸の輪郭は二重になり、黄色っぽい黒灰色です。黒い細かい毛が生えています。ピンクチュアは粗雑です。雄の前胸の縦は1.8~2.2mmぐらい、横は一番広いところで2.3~3mmぐらいです。雌のは縦は2~2.2、

幅が一番広いところで 2.5~3.2mm ぐらいです。

・前胸(口型)

上のイ型の前胸を持っているオバボタルのほかに、前胸の上の傷の下部が広く、八の字を逆さにしたような形になったのがいます。高尾山の見晴らしの近くにいるオバボタルの前胸は、ほとんどみなこの型のものです。高尾山だけでなく甲府市外、身延山、御坂峠にも口型の前胸を持ったのが少しいます。私は変種かオオオバボタルではないかと思って、岡田要に鑑定してもらったが、オオオバボタルではないと言って来ました。Gorhan(1883)の記載によると、オオオバボタルは雄も雌も、からだの長さは13mm だということです。私の採集した雌では11.5mm ぐらいが長い方でした。ついだから口型の前胸を持ったオバボタルもいることを付記しておきます。いる数は少ないようです。

本調査では佐渡島におけるホタル科昆虫の分布確認が主な目的であったが、万が一に備えて3 個体(遺伝子解析用の最低数)のみ捕獲及び標本保存していた。ところが、これまでに既存文献でも十分に評価されていない「オバボタルの前胸背の斑紋の差異」について気になり、佐渡島個体として大事な3 個体ではあったが分解して前胸背を比較した。



その結果、神田左京の提唱する「イ型及びロ型」が共に生息していることが明らかになった。佐渡島では「イ型ひし形」、「イ型三角形」、「ロ型四角形」の 3 タイプが見られる。しかし今回は、標本 3 個体での比較に過ぎず、形状の優先状況までは評価出来ていない。

(5) 今後の課題

- ① 現在は世の中にインターネットが網羅し、佐渡訪島者で自然に興味を持っている方々が情報公開してくれている。ネットによる目撃情報を集約していくことで、島内におけるホタルの生息分布もより一層明らかになる。
- ② 2014 年度は 3 個体のみ捕獲の上、前胸背の形状比較を行うために個体を分解してしまい、現在、完全な個体情報は掲載画像以外には無い。2015 年度に再度訪島し捕獲及び標本保存を実施したい。
- ③ 3 個体それぞれ前胸背の形状が一致しない個体であり、これはオバボタルの興味深い研究テーマの1つと考えられる。2015 年度も引き続き、佐渡島におけるホタル科昆虫調査(特に、ヒメボタルの生息を確認したいが、、、)の他、オバボタルの捕獲が容易な富士山の林道でも調査を実施し、前胸背の形状についての真相を明らかにしたい。

※ 資料写真

久知川 オバボタル生息地(道路脇)



久知川のオバボタル



久知川 ヘイケボタル生息地(湿地)



久知川のヘイケボタル



2 佐渡島 韋駄天走りのホテル調査

藤森憲臣、若杉和男、小俣軍平、平田秀彦（文責）

（1）初めての佐渡島

佐渡島へ初めて来た。（20 年程前、千歳へ向かう飛行機の窓から見たあの形。「アッ、佐渡だ！」と小さく呟いた事を思い出した）。この年、佐渡は梅雨末期の豪雨に見舞われ、弾崎（はじきざき）では7月9日、24時間雨量が観測史上最高の228mmを記録した。

図1. キャンピングカー(若杉氏自作で所有) 図2. ベースキャンプでの朝食風景



図3. 本調査地域の概略図

（2）4日間の調査地と調査コース

本調査3日間に動いた佐渡地域の概略図(図3)。

・・・線は7月13日の夕方から15日の夜明け午前3時まで調査して回ったコース。

——線は7月15日の午前中から深夜にかけて調査して回ったコース。

昼間調査では、陸生ホテルの生息状況調査。

夜間調査では、水生ホテル(ゲンジ及びヘイケボタル)とヒメボタルの生息状況調査を、また併せて陸生ホテル幼虫の生息状況調査も実施した。

（3）調査結果

・7月13日

両津港に着いたのが18時30分。

明るいうちに、早速、国中平野一帯を回ってゲンジ及びヘイケボタルのいそうなところの予備調査を済ませた。



図 4. 調査地とした水田地帯

このあたりは丘陵地に U 字形に囲まれた水田地帯 (図 4) がほとんどで、関東地方でいうところの「谷戸」風景とよく似ていた。

20 時過ぎ、雨の中 3 人 (平田・若杉・小俣) は合羽を着込んでベースキャンプ (佐渡市吾潟、道の駅・芸能とトキの里) を徒歩で出発した。目指すは近くの谷戸。キャンプ地を捜す道すがら「ココは良さそう」と目星をつけたところ。

立ち姿は、左から若杉氏・平田。農家の隣に湧き水が有り (図 5)、その水路にゲンジボタルが 1 匹光っていた。水田に沿った灌漑用水路の草むらには、2 秒型のゲンジボタルと思われる発光パターンのホタルが点々と発光していた。



図 5. 生息地環境と採集したゲンジボタル♀



ところが、捕虫網で採集してみると、全てヘイケボタルだった。(図 6)

水路の水温は 14°C、周辺の気温は 24°C で、水生ホタルは気温が低いと発光間隔が長くなり、反対に気温が高いと短くなるというのに何とも奇妙な感じがした。

佐渡のヘイケは本土と違うのか？

※ 図 4,5,6 は 14 日の昼間撮影

図 6. 生息地環境と採集したヘイケボタル



・7月14日

早朝、水田から丘陵地に入るとこの時期足下の草むらに陸生ホタルの成虫が飛翔したり、葉上に触角を立てて静止している姿が数多く見られるはずだと期待してまわってみた。(図7,8)

しかし、この期待は見事に外れた。トンボやチョウ、ガ、クモなどは沢山目に付くのに陸生ホタルの成虫の姿は全く気配も感じられなかった。

佐渡へ来る前に久保田正秀先生に探していただいた文献資料には佐渡のホタルは、ゲンジボタル及びヘイケボタル・オバボタルの3種のみ記載されていたが、「それはないだろう、調査不足では？」と3人で話しながら佐渡へ渡って来た。しかし調査を始めて2日目にして、この予想は外れぐらぐらゆらいできた。

昨夜の現場を再び訪れた。

ゲンジは、キャンプから北東へ約300m(北緯38.0455901、東経138.447293)、ヘイケは同じく北東へ約1,500mの位置(北緯38.053667、東経138.453645)。標高は17~19m。雑木林に挟まれた田圃の幅(谷の幅)は約40m。

ホタルについてお話を伺おうと近くの住家(図9)を訪れたが、残念

ながら留守だった。佐渡の田圃は美しい。「こんなところにも」とびっくりするほど耕地整理された田圃に耕作放棄が見当たらない。

図7. 水田地帯奥の丘陵地



図8. 水田地帯奥の丘陵地



図9. 佐渡の古民家住宅



昨夜の調査現場の記録撮影の後、両津から南下して真野に向かい、真野から県道 45 号を通り日本海側に出て、大佐渡北端まで北上。主として、陸生ホタルの生息状況を中心に調査をした。ここは、「沢根」から「下相川」に向かう途中の谷戸地形の調査の際に見かけた「露頭」の一つ(図 10)。佐渡島は、その昔、日本海の海底で逆断層の地殻変動が何回も繰り返され、隆起して誕生したといわれている。

図 10. 通りがかりに見た露頭



そのドラマにまつわる地層の露頭が各所で見られる。ここもその一つで堆積した縞模様がまぶしく輝いていた。しかし、この一帯にも陸生ホタル成虫の姿は、まったく見られなかった。

図 11. 日当たりのよい棚田風景



ここは相川集落から 3 km 程北上した所、南に向いた日当たりのよい段丘地に棚田(図 11)が拓かれていた。棚田の傍らの草地を中心に、ムネクリイロボタル・オハボタル・カタモンミナミボタルが飛翔していないかと探したが、見つからず。

図 12. 大佐渡の海岸風景



図 13. 大佐渡の海岸風景



大佐渡の県道 45 号線沿いの海岸線(図 12,13)は、何処へ行っても絵はがきのように美しい。車窓から見とれていると、陸生ホタルの調査を忘れてしまう。この静かな風景の海底に佐渡島を生み出した荒々しい逆断層の地殻変動のドラマが隠されているとは想像もできない。

図 14. 北田野浦付近を流れる小川



図 15. 北田野浦付近を流れる小川



大佐渡の南端から北上すること 30 km程、北田野浦付近を流れる小川(図 14,15)。大佐渡の日本海側には川幅約 20m 写真の清流が各所にみられる。川には水生貝類は見つからず、近くの人家には人影もなく、ゲンジボタルの生息情報も得られなかった。気温は 20℃、水温は 12℃と低い。

図 16. 県道 45 号線 大佐渡北端

佐渡の北端近く、県道 45 号、「菖蒲入口」という標識のある所の道端で「ここなら陸生のホタルが 2、3 種飛んでいるだろう」と想われるような場所があった。(図 16,17,18)

車を止めて丹念に草むらとその奥の低木の樹林内を調査してみた。左右の斜面は日照、湿度、草木の状況など自然環境は申し分なかった。しかし、ここでもまた陸生ホタル成虫はみつからなかった。



図 17. 「菖蒲入口」付近の草むら



図 18. 「菖蒲入口」付近の低木林



大佐渡の北端を回って、両津に近い海岸沿いの県道。ゲンジボタルが昔は飛んで居たと言う川を調べて見た。川向こうにいたおばあさんに声をかけてみた。昔はゲンジボタルが沢山飛んでいたが、今はさっぱりだという。ホタルを増やしたいと町民で川の清掃をしたら、いなくなったという。これはまた何ということか、ご覧のように川は綺麗になったのに、大変気の毒な話だった(図 19,20)。

図 19. 梅津の川(○印 おばあさん)



図 20. 19. 図の上流部



このおばあさんの情報で、佐渡のゲンジボタルは、もっと早くに飛んで居て、今はもう見られないが、両津の久知川では未だ見られるかも知れないという。

そこで、この後 1 日遅れでやってきた藤森氏と両津港で合流し、久知川の河口近くの佐渡市立河崎小学校を訪ねてみた。教頭先生の話で「まだ飛んでいますよ」とのこと。早速、明るい内に下見をする(図 21)。いそうな雰囲気だった。

図 21. 久知川中流



図 22. 久知川沿い歩道



日の暮れるのを待って捕虫網を携えて再度訪れた。10 数匹のゲンジボタルが崖下の川面の茂みの中で発光していた(図 22)。しかし、崖を降りるのは危険だった。残念ながら成虫は採れなかった。川沿いの山地のヤブの中には 2 箇所湿地があり、そこにヘイケボタルが発生していた。佐渡のヘイケの生息地はこんなところにもと驚くほど多様である。(図 23,24 は昼間撮影 ○印ヘイケ生息地)

図 23. 久知河内の林道



図 24. 久知河内の林道



※

この後、藤森氏の提案で、大佐渡のドンデン山にヒメボタルの調査の為に深夜から夜明けにかけて出掛ける事にした。予定外の深夜の調査では思いがけない発見があった。これについては後日(月報 69 号)、調査員の若杉氏が改めて報告することにした。乞う、ご期待。

・ 7 月 15 日

前日、深夜調査が午前 3 時まで続いたので眠い。小佐渡の新潟県側の海岸を南下しながら、陸生ホタルの調査を続けることにした。昨日、ゲンジ及びヘイケボタル、オオバボタルが飛んでいた久知川流域を再度歩いてみた。丘陵地の農道端に 3 匹オオバボタル(図 25)が葉上に静止していた。竹と落葉樹の混合林の農道端に苔むした放置木(図 26)が転がっていた。自然環境としては、オオバボタルの幼虫が好んで生息している場所だったので、羽化直前のオオバボタルの蛹が見つかるかも・・・と期待に胸を膨らませて放置木を取り崩して見た。しかし、幼虫及び蛹の姿は無かった。

図 25. 前胸背板・ロ型のオオバボタル♂



図 26. 苔むした放置木



久知河内から南下して浜河内に向かった。この川にはゲンジボタルが生息している。2012 年に小児科医の黛ただし氏に標本採集をして頂いた事があり、今回集落に入ってから黛氏のお宅を探したが、転居されたとのことで会えなかった。

浜河内を過ぎて間もなく海岸沿いの県道が工事により通行止め。山地を迂回して羽茂飯岡温泉に向かった。1 時間ほど温泉につかり前夜の疲れをとり、小佐渡南端にある蓮華峰寺(れんげぶじ)を訪れ、この寺の近くにある谷戸地形の丘陵地を 21 時過ぎまで調査した。(図 27,28)

図 27. 蓮華峰寺



図 28. 蓮華峰寺から約 2km の調査地



今は使用されていない川沿いの農業用水路にヘイケボタルが発光しながら 2、30 匹飛翔していた。ゲンジボタルも数匹だけ高いところを発光飛翔しているのが観察された。しかし、お目当ての陸生ホタル成虫及び幼虫とも見つからなかった。

帰路、深夜に小佐渡の山地を車で縦断しながらここぞと思われる所で、車を止めて落葉樹林内、道路沿いの草むらなどをいつものように竹の熊手を使ってかき回し、発光する陸生ホタル幼虫探しを試みたが、ここでもまた、生息する気配や反応は感じられなかった。

・7月16日

午前8時前に道の駅のキャンプ地を出て、両津港に向かった。大佐渡及び小佐渡と江戸時代の飛脚の韋駄天走りのように車で走り回った今回の調査。お目当ての陸生ホタルには、オバボタルしか出会えなかったが、初めての調査にしては楽しい調査だった。何よりも嬉しかったのは、テントではなく若杉氏のキャンピングカーで眠れたこと、若杉氏の手作りの食事が美味しかったこと、疲れを知らない藤森氏の早朝から深夜に及ぶ調査にお供をして高齢者の3人が若返ったこと……。

帰りの船内で藤森氏と標本の整理をした(図29,30)。

図29. 佐渡・両津港



図30. 佐渡個体の標本整理



(4) おわりに

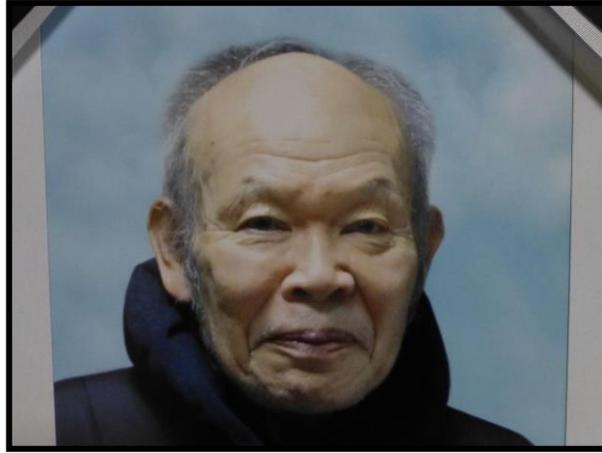
今から300万年前に深海底から隆起して誕生したといわれる佐渡島、本土と陸続きになったことはない。

ホタルは外から持ち込まれたか？自力で移住したか？のいずれかと思われるが、文献記録にあるオバボタル(1968年)が記録後50年近くになるというのに、久知川流域の約2kmの極めて狭い範囲でしか見つからなかったのは、何とも不思議だった。ゲンジボタルと違い、この種はこの時期に佐渡島でも羽化の季節だった事は間違いない。また、生息環境も極めて良好だった。

ゲンジ及びヘイケボタルは両津から南一帯の平坦部と小佐渡の川には各地に生息しているようだ。これは、どうやら人の手による持ち込みの可能性が高い。そうだとしたら何処からどの様にして持ち込まれたのか？

佐渡は新潟県内だが「歴史的、文化的には京都の影響を色濃く受けている」と故小西正泰先生は生前話しておられた。もしかしたら、京都から北前船で運ばれて来たのだろうか？その興味は尽きない。

3 川副昭人先生を偲んで



昨年の秋、11月25日に、川副昭人先生が逝去されました。ご冥福を祈り謹んで哀悼の意を表します。

川副先生と私の出会いは1998年4月の兵庫県加西市で開催されたヒメボタルサミットの会場でした。その時は私はまだヒメボタルに関わったばかりで先生と言葉を交わすこともありませんでした。その翌年、1999年3月に「池田・人と自然の会」を発足するに当たり当会の顧問をお願いしたことで急速に親しくなりました。親しいと言っても生物学のみならず英語、フランス語に堪能で、高校では歴史や数学の教鞭を執り、全ての学問に精通しておられ、どんな質問にも即答して下さる先生と弟子という関係でした。それでも先生はいつでも親近感にあふれ年齢を超えて友達感覚でお付き合い下さるお人柄でした。

川副先生は、豊中ヒメボタルを守る会のスタッフとして実質は那須野さんと他に1、2名の方々と活動されていました。豊中と池田の違いはありますが先生のお宅から我が家までは2～3kmなので時には歩いて遊びに来られました。たいていは那須野さんのお宅で昼から晩まで食事をいただきながら色んな話に明け暮れました。生物、昆虫、戦争、政治、精神世界、中でも地球温暖化には大変関心を持っておられ、「このままいくと地球はだめになる。人類は後もどりできないところまで行くのか後10年長生きして見届けてから死にたい」と言われていました。今がその時期だと思いますが先生の結論はどちらだったのでしょうか。

この15年の間に那須野さんの運転で先生とあちこちのヒメボタルを見に行きました。淡路島では真っ暗な中を平気で歩かれる先生の服をつかんでついて歩いたのを思い出します。和田山ではお目当てのヒメボタルはさることながら稲津さんに昔からの友人のごとく暖かくお迎えいただき感動しながら帰路についたのもついこの間のことのようにです。金剛山では深夜に山道を登ったり下ったりしましたが先生は大変な健脚でついていくのが精一杯でした。また、私がヒメボタルを飼育していたことで先生は「教えてほしいことがあります」と大変低姿勢に電話をかけてこられました。大英博物館のフェローをなさり、大英博物館から本を書くように依頼された日本人は南方熊楠と川副先生だ

けだと伝え聞いたようにも思います。それでも生涯誰に対しても上からの目線で話されることはありませんでした。そのような先生がもういらっやらないのは本当に残念でなりませんが、私には先生との出会いがあり直接ご指導いただけたことで感謝の念に堪えません。

「池田・人と自然の会」事務局:今城香代子

※ 著書

原色日本蝶類図鑑(1976) 保育社 (川副昭人・若林守男)

4 あとがき

・ 上記の今城香代子氏の追悼文に有りますように、昨年(2019)の11月25日に、大阪府 豊中市在住の川副昭人先生が逝去されました。改めて心からご冥福をお祈り致しますと共に、謹んでお知らせ致します。

先生は、一昨年に亡くなりました、小西正泰先生とはご兄弟のような親しい仲でした。その為、陸生ホタル研の前身、「板当沢ホタル調査団」時代から、私達は、一方ならぬお世話になりました。事務局の発行する 拙い調査報告、「板当沢」・「陸生ホタル研」についても、毎号お届けする度に、はがきやお手紙で丁寧なご助言をくださいました。

2009年に、八木剛先生が主催しておられる「ヒメボタルサミット」を、八王子市で開催した際にも遠路わざわざお越し下さいまして、会場から親身にあふれるご助言をいただきました。あの日のことが、昨日の事のように臉に浮かんで参ります。

小西正泰先生に続き、川副昭人先生も逝去され、私達は、これから日本産ホタル10種の生態研究をどの様に継続していったら良いのか……、悲しみに打ちひしがれています。でも、いつまでも悲しみにくれている事は、川副先生のご遺志に反します。16年間にわたりご指導いただいた数々の課題を胸に、事務局員一同力を合わせて頑張っていきたいと思っております。今後とも、会員・調査協力者の皆さん方のご支援・ご協力を心からお願い致します。

・カタモンミナミボタルの幼虫についてお願い

本土産のホタル10種の中で、未だ蛹の見つかっていないカタモンミナミボタルの幼虫について、新たな発見がありました。詳しい報告は、3月末の調査月報70号に掲載予定ですが、会員・調査協力者の皆さん方で、この種の幼虫の飼育記録や写真をお持ちの方がおりますでしょうか？おられましたら、教えていただきたい事があります。恐れ入りますが、メールまたは、電話で事務局までお知らせ下さい。お願いいたします。 以上

電話 042-663-5130

EM rikuseihotaru.07@jasmine.ocn.ne.jp